



QUICK

BATTLE

in 無計画書房  
参加作品集

## クイックバトルとは

---

以前テキストサイト「テキスポ」において毎週土曜日の夜に開催されていた企画。  
出されたお題に対して60分で短編を書くというオンライン執筆イベント。

元々の発端は太友豪さんの開催された「高速執筆会」

## クイックバトル 今回のルール お題

---

### 1. ルール

1時間以内に小説、詩、コラムまたはイラストを書くor描く。  
他には写真とか朗読とか歌とか論文とか彫刻とか.....etc.

### 2. 参加資格

特になし。web上に作品をアップし公開できる方

### 3. 日時：25日の夜10時

### 4. 予定

21：55/主催者がお題を選定。

22：00/お題発表

23:00/終了。15分の推敲、投稿タイム開始

23:15/締切。他の人の作品を読みつつ反省会ハングアウトへ

### 5. お題

末尾文章「それを僕はまだ捨てられないでいる。」（私、俺、名前、etc...も可。

↓実際の開催場所

[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_20.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_20.html)

## 参加作品 一覧

---

今回のクイックバトルに参加してくださった方の作品です。

投稿順です。敬称はさん付け。

著者名

作品名

投稿時間

公開場所のアドレス

著者名：ジュニーさん

作品名：君が僕にくれたもの

投稿時間：22:25

公開場所のアドレス：[http://texporemnants.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_25.html](http://texporemnants.blogspot.com/2012/02/blog-post_25.html)

著者名：ひやといさん

作品名：

投稿時間：22：53

公開場所のアドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_20.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_20.html)（コメント欄のところですよ。）

著者名：シゾワンパーさん

作品名：言い訳させてください！ 不調だったんです、不調だったんです！

投稿時間：22：55

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_25.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_25.html)

著者名：茶屋休石

作品名：母の写真

投稿時間：22：57

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_942.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_942.html)

著者名：たきてあまひかさん

作品名：信じてなんかいないのに

投稿時間：23：12

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_3661.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_3661.html)

著者名：山田佳江さん

作品名：監禁

投稿時間：23：15

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_8678.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_8678.html)

著者名：あやまり堂さん

作品名：不可捨（すつべからず）

投稿時間：23：16

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_9689.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_9689.html)

著者名：雨森さん

作品名：ウミトハネ

投稿時間：23:16

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_7018.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_7018.html)

著者名：太友 豪さん

作品名：きみはじめて恋をするとき、色とりどりの光の乱舞を見るだろう

投稿時間：23：17

公開場所アドレス：[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_8067.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_8067.html)

番外編

高田さんの描きかけ

[http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post\\_9253.html](http://mukeikakusyobo.blogspot.com/2012/02/blog-post_9253.html)

それを僕は彼女から付き合い始めてから半年後の僕の誕生日に貰った。  
彼女がそれを何故僕にくれたのかはいまだに分からない。  
僕も彼女もいい歳だったのでそれを使っても問題はなかった。  
だが僕はそれを使うことに抵抗があった。  
彼女との関係が変化することを恐れたのだ。  
それに、僕は僕たち2人にはそれは必要ないと思っていたからだ。

それを貰ってから2年が経った。  
僕は突然彼女から別れを告げられた。  
「私に興味がないのね」  
そう彼女は言った。  
返した僕の答えは「そうかもしれない」だった。  
「じゃあ、別れましょう」  
突然の別れ話にも僕は冷静であった。  
それを貰ってから僕はこの日が来るのを予想していたからだ。

彼女と別れて3年が経つ。  
僕は彼女から貰った優しさというプレゼント。

それを僕はまだ捨てられないでいる。

それを僕はまだ捨てられないでいる。

道端で、ばったりクラスの1人とあった。女子だ。

けっこうかわいい。

でも会うなり彼女は、いきなり僕にこう言った。

「ねえ、こないだ買うとか言ってたDVDどうだった？」

知ってたのか。

仲間内で話していたのが耳にはいったんだろう。

実を言うと、そのDVDはAVだった。

とても彼女にあげられるもんじゃない。僕は言った。

「すごいつまんなかった、捨てちゃったもん」

「なんで売りに行かないの？」

「めんどくさかったんだよ」

「私にくれたらよかったのに」

「ああ、そういえばそうだよ」

「買ったのって、実はAVなんでしょ？」

それも知ってたか。

大きな声で話したのがいけなかった。

「私も、一緒に見ればよかったなあ……」

え？

「……キミとだったら、一緒に見てもいいよ？」

彼女は平然と、僕に言った。

なんて大胆な事を言うんだろう。

聞くなり、なんだか恥ずかしくなった。

「ば、バカいうなよ。じゃあな」

そのまま彼女を置いて、僕は走って逃げた。

実をいうと、それを僕はまだ捨てられないでいる。

いや捨てたなんて、ウソだった。

でも、このAVは、彼女には見せられない。

だって、お父さんに買ってもらったものだから。

ああ、お父さん。

AVなんて、僕はいらんよ。

僕はホントは、お父さんの事が好きなんだから……。

お父さん、ああ、お父さん。

なんでわかってくれないんだ.....。

家に帰った僕は、部屋に入るとすぐジッパーを下げた。

だから、それを僕はまだ捨てられないでいる。

言い訳させてください！ 不調だったんです、不調だったんです！  
ワンパー

著：シゾ

エコロジーという名の病が人類に蔓延した。

「地球に優しく、されど快適に」

買収された学者と、そのパトロンであった企業は、それが可能と謳った。

論理武装されたエコロジー商品はウソをついていなかったが、不都合な側面には口を噤んでいた。

ミスリードされ、それらの商品を贖うことに喜びを見出す人々。

「地球に優しく、されど快適に」

実際には、その時点の人類の科学力と認識では不可能なことだった。

多くのエコロジー商品は、より多くの資源とエネルギーを消費し、後進諸国に対する搾取が進んだ。

後進諸国の人々は生活を成り立たせるために、自らを取り巻く環境を悪化させていくほかはなかった。

それしか道がなかったから。

警告する者もいた。

しかし、エコ商品で潤った巨大資本が、その口を塞いだ。

先進諸国で、人々が喜んでエコ商品に手を出すとき、地球全体ではダメージの方が上回っていた。

そんな、ある意味文明の絶頂期において、ポールシフトが発生した。

地軸が傾き、大地震や津波が都市を破壊し、温帯が寒帯に変わった。

それはまるで地球が身震いしたかのごとく。

害虫を身体から払い落とすがごとく。

人類はその数を大幅に減らしたが、生き残りはもう環境に配慮する、偽の余裕を持たなかった

。

過酷な環境で生き残るため、残存した科学技術を駆使した。

ありったけのエネルギーを使い、都合の良いように生物を改変した。

人類の総数は減ったが、生態系を初めとする地球の仕組みは、さらに激変していった。

この後、何が起こるかは誰にも分からなかった。

人類は生き残るために、予測不能の道を突き進んでいくしかなかった。

人間。

それを地球はまだ捨てられないでいる。

母は僕が幼い頃に死んだ。

だから、僕は母がどんな人なのかよく知らない。

父に聞いてみると、優しいお母さんだったよ、というのだが、そこにはどこか困惑の色が浮かんでいる。

困惑の色、というのは、どんな色なのか口では説明しにくいのだけれども、明るいのにどこか影を帯びた橙色のような感じだ。

父は時々、母の写真がのったアルバムを見せてくれるのだけれども、僕が一歳になって以降、写真は一枚も残されていなかった。

写真を撮るのを嫌がったんだ。

そう、寂しそうに父は言った。

僕は一歳の頃原因不明の病気にかかった。何件も医者まわったけれども原因はわからず、有効な治療法も見つからなかった。

それでも父と母は僕を見捨てずに、必死に看病してくれた。

覚えているわけではないけれども、苦しい闘病生活は2年ほど続いた。

そして、母は死んだ。

仏壇の遺影には笑顔の母が写っている。

アルバムの写真には笑顔の母が写っている。

だから僕の頭の中にいる母はいつも笑顔なのだ。

笑顔で僕を優しく撫でてくれる母。笑顔で料理を作ってくれる母。

母のイメージは、ぼんやりとしている。

少しでもそのイメージを固めようとして、母の話を父にせがむのだけれども、父はあまり話したがらなかった。

いつだったか、そんな父への苛立ちが爆発してしまったことがある。

「父さんは母さんのことが好きじゃなかったんだ！」

その言葉を聞いた父は啞然とし、そしておろおろとあたりを見回して、涙を流し始めた。

「違う……違うんだ。私はふたりとも守りたかったんだ」

優しく、そして頼もしい父のこんな姿を見せるのは後にも先にもこの一回きりだった。

そして僕も母の話を聞くのはそれっきりにしてしまった。

父の言った言葉の意味が、何なのかその時の僕にはまだわからなかった。

その意味を知ることになるのは、大学受験を終えた頃だった。進学することになった大学は家から遠くはなれており、一人暮らしをすることになった。

一人暮らしは楽しみだったものの、長年住み慣れた家を離れるのは寂しいし、父の背中では以前よりも小さくなった気がしてなんだか心配にもなった。

僕は家をしっかり見てみよう、家の探索をはじめた。

子供の頃の落書き、身長が伸びるたびにほった柱の傷、父と喧嘩した時八つ当たりにつけた壁

の穴。  
家の模様一つ一つに思い出が浮かんでいた。  
それを見つけたのは5回目の探索の時だった。  
仏壇の横の戸棚。  
それまではそこを開けようなどとも思わなかったし、必要性もなかった。けれどもそこがどうしても気になったのだ。  
中には褐色に濁った段ボール箱があった。  
包丁と、薬の入った瓶と、褐色にくすんだ小さな服、そして一枚の写真が納められていた。  
褐色は、血の乾いた色だった。  
「見つけてしまったんだね」  
振り向けば、悲しげな顔の父が立っていた。  
父はゆっくりと僕の横に座り、懐かしそうに段ボールの中をながめ、やがてぽつりぽつりと語りだした。  
僕が生まれた頃から、母は段々とおかしくなりはじめていた。  
月並みな言葉で言っているのかわからないが、育児ノイローゼだったのだろう。  
父は仕事が忙しくなり始めた頃で、それに気づくことが出来なかった。  
そして、僕の病気。  
それが母を完全に狂わせた。いや、それは母から父への最後のSOSだったのだ。  
母は僕に毒を飲ませていたのだ。  
父は僕の異常に気づいても、母の異常には気づいてやれなかった。  
そして。  
母は僕を殺そうとした。  
母は大量の睡眠薬を飲み、僕を包丁で殺したあとに自殺しようとした。  
けれどもそれは実行に移されなかった。  
睡眠薬を飲んだ母が僕に包丁を突き立てようとしているところを、帰宅した父が見つけた。  
父はとっさに僕を助けようと、母を止めようとした。  
揉み合い。  
母の力は思いのほか強く、父も必死だったという。  
揉み合い。  
血。  
包丁が母の喉に刺さった。  
父は急いで救急車を呼んだが、睡眠薬を飲んでいたり、助からなかったのだという。  
「私は、ふたりとも、たすけたかったんだ」  
父はそう言って泣いた。

写真は僕を抱いた、笑っていない母の写真だった。

それを父はまだ捨てられないでいる。

すべては嘘から始まった。

元々は、たまたま拾ってポケットに入れていた、ただの石ころだった。墓石屋からこぼれたのだろうか、小さな御影石の欠片。

「これは、魔法の石なんだよ。プラズマの力で人を幸せにする不思議な石なの」  
転んで泣きじゃくる小さな子どもの、擦り傷だらけになった膝にそっとその石を当てながら、私はそう言った。

子どもをあやすための、その場かぎりの嘘でしかなかった。それなのに。

——子どもは泣き止み、私に微笑みかけた。気がつけば、その子の母親らしき人物が近くに来て、私にお礼を言っている。

別に対した事をしたわけではない。子どもの膝の傷も生々しいままで、手当をしてあげられたわけでもない。ただ、口からでまかせを言っていただけだ。

去っていく母子にお辞儀をしながら、手のひらの中の小さな石ころをぐっと握った。

魔法なんて、何も無い。何も無いのに。

それを私はまだ捨てられないでいる。

ボタン、という音がした時、なんとなく嫌な予感を感じたのだ。僕は湯船から上がり、浴室から出ようとする。磨りガラスの扉を押しても、それは開かない。

脱衣所からは、脱水機の回る音が聞こえる。僕は状況を把握する。閉じ込められてしまった。

春物の衣類を出し、冬物の衣類を仕舞うため、僕はかび臭い衣装ケースを洗った。風呂場でぬるいシャワーをかけると、プラスチックのケースはすぐに綺麗になった。

少し濡れてしまったシャツを洗濯機に入れ、衣装ケースは洗濯機に立てかけた。スイッチを入れて洗濯を開始した。そうして僕が風呂に入ってる間に、洗濯機は脱水モードに入った。ボタン、と音がした。僕は閉じ込められた。以上。

ぎゅうぎゅうと扉を押すと、ほんの少しだけ隙間が空いた。洗濯機に立てかけておいた衣装ケースは倒れてしまい、洗濯機と浴室扉の間にぴったりハマっている。力を込めて押したので、プラスチックが少し歪んでいる。

身体が冷えてくる。僕はもう一度浴槽に入る。ぬるくなってしまった湯に、熱い湯を足す。それからどうしたものかと考える。

少し考えてから、僕は風呂掃除用のブラシを手に取り、扉の隙間から外を探る。洗濯機の上に、さっき脱いだジーンズが置いてあるはずだ。僕は手をめいっぱい伸ばして、ブラシの先にジーンズを引っ掛ける。

たぐり寄せたジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、僕は幾分ほっとする。さて、これからどうしたものだろうか。

僕を助けてくれそうな人はそう多くない。1、新幹線で三時間かかる実家に住む母親。 2、今日明日は彼女と箱根に行っている友人。 3、レスキュー隊員。 4、まだ合鍵を持っているはずの元妻。

携帯電話を開く。バッテリー残量の目盛は残り1つになっている。母親も友人も、僕の部屋の鍵を持っていないし、今日は土曜日だからマンションの管理人も居ない。いくら考えても、同じ街に住む元妻に連絡を取るのが、一番良い選択肢に思えた。

彼女は今、どうしているのだろう。

「風呂に閉じ込められたんだ」

と電話をしたら、彼女はなんて言うだろう。呆れるだろうか。あるいは笑ってくれるかも知れない。そうしてこの部屋を鍵を開け、散らかった部屋を見て、

「しょうがない人ね」

なんて言ってくれるのではないだろうか。

携帯電話のアドレス帳から、元妻の名前を探す。緊張で胸が痛くなる。通話ボタンを押す。まず、彼女に今までのことを謝ろう。それから助けを求めよう。それから……

「この電話番号は、現在使われておりません」

電話機からアナウンスが虚しく響く。僕は終話ボタンを押し、選択肢3番を選ぶ。119番への通報。消防隊員はすぐに来てくれるという。

身体はすっかり冷えてしまった。アドレス帳に記されている、元妻の名前をぼんやりと眺める。現在使われていない電話番号。

だけどそれを僕はまだ捨てられないでいる。

結論を言えば、僕はそれをまだ捨てられないでいる。  
けれどそれを捨てなくちゃいけないことは、よくよく知っている。

捨てなくちゃ、僕はきっと、このままずるずると、  
中学や高校生の当時と同じ幼稚さで、これからの人生を送ることになるだろう。

夢とか、恋の思い出とか、僕の童貞とか。

要するに、そういった「無知だったころに抱いていた憧れ」の数々を、  
一つずつ捨てて行くことで、人は大人になって行くのだろう。  
現実を知って、自分の才能の限界を弁えて、分相応に生きて行く。

ほどほどの会社に就職して、全然おもしろくない仕事を  
与えられるまま、こなしながら、  
感動することもない、といて嘆くほどでもない程度の収入を得て、  
ささやかな人生を歩んで行く……そこで、きっと、夢なんて捨てることができる。

宇宙飛行士になるという夢は、とっくに、中学で、理科と数学が出来なかった頃に捨てた。  
部活で打ち込んだ、水泳の国体選手とか（それさえオリンピックという夢を捨てた後だ）、  
あとは漫画家になることとか、歌手とかバンドとか詩人とか小説家とか。

そういった夢を全部捨てて会社に所属、数年経って、  
同僚が企画する合コンか、大学同窓会とか地元自治体の企画するお見合いパーティか何かで、  
かわいいところもある、という程度の女性と知り合うだろう。  
そこで相手も同じような感想を僕に対して抱きつつも、とりあえず流れで交際することになり、  
相手の三十歳の壁か何かで結婚が決り、  
やがてラブホテルで少しの軽蔑を浴びつつ（というのも、きっと僕は緊張で失敗するからだ）、  
とにかくセックスして童貞を捨てるだろう。

それでその時になれば、昔の恋の記憶なんて全然、どこかへ捨て去っているはずだし、  
とにかく、そんなふうにして、僕はひとつひとつ捨てながら、  
「自分自身の人生」を見つけることになるのだろう。  
だから、そういう「幼稚な憧憬」というようなものは、  
順番に、一つずつ、時にはまとめて、捨てる。  
捨てなきゃこの社会の大人として生きて行けない。

ところで――。

奈良には今も、大安寺という古い寺がある。

南都七大寺に数えられ、奈良時代には興福寺と並び称されたほどの大きな寺である。

だが都が平安京に移ってからは振わず、火災などに遭うなどしてさびれていた。

しかし、さかのぼれば「大官大寺」や聖徳太子の時代にまでつながるような、  
伝統ある大寺であることは事実だ。

そのため、寺では都が遠くなってからも有力貴族を味方につけようと様々に働き、  
寛弘四年（1007年）には御堂関白こと、藤原道長を寺へ招くことに成功している。

だがそれも、十年後の寛仁元年（1017年）、大火によって伽藍を全焼させ、  
以後は見る影もなくなってしまったのである。

「これではいけない」

というので、名は残っていないが数代に渡って時々の別当や僧住たちが駆け回り、  
時には唯一焼け残った本尊の釈迦如来像を持ち出すなどして、各方面で寄進を募ること数十年、  
永久四年（1116年）までには、  
何とか金堂、回廊、重塔さらに鐘楼などを再建することに成功するのである。

だが。

この永久当時の別当が、私利私欲にきたない男だったからいけない。

せっかく、娘を都の蔵人の妻にすることにも成功したのに、

「寄進された品々を着服しているのではないか？」

と勘づかれて、結局、蔵人との関係が破談、

ついに、往事の威勢を取り戻すところまではできなかったのである。

今もその伝統の割に、知る人はそれほど多くない。

すくなくとも興福寺や、東大寺ほどに、奈良の寺として名を売ることはできなかった。

無残な話である。

……。

まったく関係ない話を書いていた。

僕はこの大安寺の話を、いつか小説にしようと思って、資料を集めて、ある程度の構想までまとめていたのだけれど、やっぱりどうしてもうまく小説にするところまでできていなかった。

要するにこの構想もまた、僕は捨てることができないでいる。  
今も。

そしてたぶん明日も明後日も、僕はずっと、全然捨てられないでいるだろう。

(了)

妹がそのチケットを手に入れたのは僕が十歳、妹が五歳の時だった。

「にいちゃん、うみからこれあげる」

僕に両手でさしだしたチケットは『やくそくけん』と書かれてあり、僕がそれがどういう意味で書かれたのかを妹に聞くと、まだ幼い妹は、

「うみはにいちゃんとけっこんするの。そのやくそく」

そんな事を言ってきた。当時もう思春期に入りかけだった僕は、この妹の『やくそくけん』を笑顔で受け取りながら内心ではおかしい戸惑いも感じていた。

両親は、妹の宇美が生まれてすぐに離婚し、僕たち兄妹は母の祖父母に引き取られ、育てられてきた。母は実家である祖父の家にほとんど顔も出さず、宇美が幼稚園生になった年に知らない人と再婚して、それ以来顔を見ていない。

僕たちの親代わりとなった祖父母はやさしかったが、それも宇美のあの病気が発症するまでの話だった。

それは宇美が九歳になった時に始まった。

「兄ちゃん、背中が凄くかゆいんだけど」

そう言って僕に背中を見せた。妹のシャツをまくって背中を見てみると肩甲骨の上に小さな傷ができており、それが赤く腫れていた。

「傷みたい。触るなよ？」

そう言い付けたものの、宇美はたびたび背中のかゆみを訴え、そのたびに僕に泣きついてきた。ある日、僕が部活から帰るといつものように飛び出てくる宇美の顔が見えない。いぶかしんで宇美の部屋に行くと、宇美はベッドにもぐりこんで泣いている。

「おい、どうしたんだ？」

ベッドの傍まで歩み寄る僕に宇美はいつもかゆみを訴えている背中を見せた。

翹だった。

妹の背中肩甲骨の上に、それぞれ二枚の虫の翹が生えていた。

現代でも難治とされる慢性上皮石灰翹腫という病気だった。

妹は何度も手術をしたが、取り除くたびに翹が生えてきた。翹が生える以外は特に問題になる症状がない事を理由に祖父母が宇美に治療を諦めるように言ってきたのは宇美が十二歳の時だ。もちろん、医療費が嵩んで家計が苦しかった事を知っていた僕と宇美は、それ以上祖父母を苦しめるつもりはなかった。

五年が過ぎた。宇美は十七歳、兄の鼻根目じゃないがとても美しい少女だった。

だが、背中に虫の翹が生えている妹に近寄る異性はいなかった。――というより、妹の方が異性を遠ざけていた。高校一年のときに彼氏ができたとはしゃいでいたが、それもほんの一時期の事だった。たとえ兄でも男である僕には言えなかったのだろう。だが僕には薄々だが気付いていた。宇美は恋人にその翹を見せたのだ。そしておそらく手酷い振られ方をした。

宇美がそうやって苦しい青春を送っている中で、だが僕の方はなぜか幸福だった。今から考えればこの美しい妹を何年も一人占めにできたのだと素直に思えるが、当時の僕にはその幸福を素直には受け入れられなかった。僕は何度も妹にデートを薦めたり、僕の大学の友達で信頼できる奴を紹介したりした。

だがそれが逆効果だったのか、宇美は頑なに異性との接触を拒んだ。

「私にはおにいちゃんがいるから、大丈夫よ」

僕はそんな妹に困惑顔をしてみせながらも、内心では無上の喜びがあった。

四年が経ち社会人になっていた僕は、祖父母の家を出て二人暮らしを始めていた。

宇美は大学三年生で相変わらずの男嫌いだが、それなりに充実した生活を送っているようだった。僕はいつまでも妹と一緒に暮らすのだと思い込んでいた。あいつの背中の翅を受け入れてやれるのは僕だけ、そんな陶醉めいた思いに浸っていた事にも気付かなかった。

ある日、宇美は彼を連れてきた。

石間くん。以前僕はいつものようにデートをすすめた僕と同じ大学のサークル出身の後輩だった。もちろん、僕の前に異性を連れてくるなんて始めての事であり、僕は緊張した。

「宇美さんと交際させて頂くことになりました」

出会いというのは一面で難しく、一面でなんともあっけないものだ。その石間という男は既に宇美と僕だけの秘密だった『そのこと』を知っていた。

「お兄さんにお許しを頂ければ宇美さんと結婚をと考えています」

若い癖にずいぶん堅苦しい事をいうこの男を、僕は「こいつ、いい奴だから」と褒めた。内心では静まりようのない後悔の嵐が吹き荒れている事を妹は知りもしない。

石間は結局宇美の外見に惚れただけではないのか、体が目当てで背中の翅を見ないフリしてるだけだろう。夜になると僕の妄想は大波となって揺れた。そして朝になると静まった。

僕は石間と宇美の結婚を許した。結局僕の思いとは、僕を狂人にさせる類のものではなかったのだ。朝を迎えたとき、僕は必死で自分をそう納得させた。

宇美は八年前に石間と結婚して、今では一児の母だ。

どことなく僕に似ている。夫である石間と宇美が生まれたばかりの甥を見てそう言って笑った時の事は今でも昨日の事のように覚えている。六歳になる甥には、まだ翅は生えていない。たぶんきっと生えない。

そして去年、宇美にさらに嬉しい知らせがあった。持病である慢性上皮石灰翅腫の再発を抑える新薬が厚生省から認可されたのだ。石間の後押しもあって、宇美は最後の手術に臨み、その背中の翅と決別した。

「それ、おにいちゃん持っててよ」

麻酔から醒めたばかりの白い顔のまま、宇美は僕に言った。取り除かれた宇美の翅は乾燥して小さく縮んでいた。

「バカゆうな、こんなものいらぬよ」

そうやって断ったが、宇美の頼みもあり結局その翅はビーカーに密閉されて今僕の部屋にある。

それを見るとなぜか僕は、いつも妹の結婚式を思い出すのだ。石間は僕に向けたスピーチでこんな事を言った。

『お兄さん。宇美をずっと守って下さってありがとうございます。これからは宇美を守る仕事を僕にも分けて下さい。きっとこれからは僕とお兄さんが両翼に、宇美を守る天使の両翼になるでしょう』

僕は今も一人にいる。

宇美を僕をつなげていた虫の翅は取り除かれ、僕の心にも一応のケリがついた、そのつもりだった。今年の秋には石間くんと宇美にもう一人家族が増えるそうだ。その知らせを聞いたとき、自分の事のように嬉しかった。

でも宇美の翅が入ったビーカーと一緒に、あのチケットがクローゼットの中にある事を、さて宇美は知っているだろうか。『やくそくけん』僕はそのチケットを後生大事に持って、一体どうしたいのか、兄として妹の幸せを祈っていたいのか。

それを僕はまだ捨てられないでいる。

<終>

耳の奥にへたくそなハーモニカの音がこびりついている。

僕と三島くんの出会いは幼稚園にまでさかのぼる。僕は幼稚園児の時から社交性に乏しかった。

一人砂場でダムを造っていた僕に猫除けの網を投げつけ、ドロップキックしてきた元気のよい男の子が三島くんだった。

三島くんは当時としてはとても珍しいストロングスタイルのいじめっ子だった。気に入らなければ殴るし、特に理由がなくても蹴る。

三島くんとのおつきあいは、二十年の長きにも渡ったわけだけれども、なぜ彼が僕に目をつけたのかは今もよくわからない。

三島くんのいじめスタイルは、「こいつは俺だけのオモチャ」型だった。

そんなわけで、ずいぶんひどい目に遭わされたけれど、僕は三島くん以外の人間のいじめられたことがない。

殴られたの蹴られたりだのは、三島くんを見返したくて始めた実践空手の道場でさんざん経験した。

僕も三島くんも、この地域の平均より少しだけ下の世帯収入の家の子だった。わかりやすくいえばはっきりと貧乏ということだ。

僕はぼんやりと生きて、中学を卒業するまで人を好きになったことがなかった。僕も男だから頭の芯がじんじんとしびれるような欲望は起きている時間のほとんどは感じ続けていたけれど、それと恋を間違えるほど僕の頭は鈍っちゃいなかった。当時はね。

三島くんは、僕よりも速く頭の芯の痺れが、脳みそ全体に及んでしまった。

可哀想に、中学生の三島くんは恋を知ってしまった。相手はブラスバンド部に籍を置く犬童（いんどう）さんだった。イヌという時が入っている姓だったけれど、全体的な印象は猫っぽかったと思う。結局僕は彼女とは一度も話さないうままだったから性格については保証できないけれど。

僕たちの通う公立中学校のブラスバンド部は、もちろん楽器の貸し出しを行っていた。けれど、僕も三島くんも金管楽器のビカビカが怖くて近づけなかった。当時の僕たちは、カラス並みだった。

けれども、三島くんは勇気を出した。彼は、家から手垢やホコリでスモークグレーになったハーモニカを持ってきたのだ。「ブルースハープっていうんだ、ドイツ産だぜ」などと三島くんは言っていた。

ブラスバンド部の主な活動場所は後者の西端。僕たちの通っていた中学校の校舎には両端に避難用の外階段が備え付けられていた。

三島くんは二階と三階のあいだの踊り場で孤独にラブソングを送り続けた。

ブラスバンド部からしてみれば、開いた窓の外から調子外れな童謡なんかが

聞こえてくるのだから堪ったものではないだろう。

外階段の下でしゃがんでいると階段を下りてくる女子のスカートの中身がちりちりとぞくことがあるのを気づいた僕は、そんな三島くんを地上から応援していた。ちなみに中学の僕は点から降り注ぐ色とりどりの光の乱舞を心から堪能したとだけいっておこう。

……どういわけか三島くんは自信に満ちあふれていた。力一杯ハーモニカを吹くものだから、地上の僕までその音色が届いてきたものだ。

三島くんの恋の行方については言わずもがな。基本的に暴力的で傲岸不遜で、自分の家のことを馬鹿にする人間を力で押さえてきた三島くんの失恋はあつという間に全校中に知れ渡った。

当時は誰もがそれを笑い話にした。

けれど今日、その話をする三島くんの家族の顔には懐かしむような優しい笑みが浮かんでいる。

東京で、通り魔から他人を守ろうとして巻き添えを食って三島くんは死んだ。

ちょうど三年前の今日のことだ。僕のポケットには、熱にあぶられ元がなんだったのかわからないほど変形した金属のかたまりがある。

HOHNER社のブルースハーブの共鳴板。

火葬される直前の三島くんの手が強引に握らせたせい、普通なら溶けて流れてしまうはずのものが残ってしまったのだ。

僕は、三島くんの家族の目を盗んでちっぽけな金属のかたまりを喪服のポケットに滑り込ませたのだ。普通なら親族しか列席しないお骨上げの席に僕がいたのは、三島くんの友達に僕だけで、僕の友達も彼だけだったからだ。

たった一人だけの僕の友達の、誇るべき最初の失恋の証。

それを僕はまだ捨てられないでいる。